

2015年7月1日発行

音楽文化の創造

音楽文化と生涯学習の総合情報・研究誌

73

特集
スポーツと音楽



cmc
Creating Music Culture

タテ線譜による ピアノ導入の試み

昭和音楽大学電子オルガンアドバイザー

阿方 俊

はじめに

「ピアノが弾けたらいいな」とピアノに夢や憧れをもつ人は、世代を超えてシニアでも他の世代同様に多い。これは「英語が話せたらいいな」と願う人が全世代に渡ると同じことといえよう。

同時に、若い時にピアノにチャレンジしたものの、途中で挫折した人がかなり多くいるのも事実である。その人たちの大半は、楽譜が「読めない」「難しそうだ」「忘れてしまった」など、楽譜がネットワークでピアノを弾くことをあきらめてしまった人たちである。

一方、カラオケでは楽譜を読みながら歌っている人を見たことがない。ここには、楽譜で音の「高さ」や「長さ」を理解した後で歌うという方法とは異なる世界がある。そしてここで歌っている人の多くは、音楽に入り込んで楽しく歌っているのが特長である。

ここで、従来の楽譜を使用しないカラオケスタイルとでもいえるタテ線譜メソッドによるピアノ導入の実践をレポートし、シニアを含む新しい音楽需要を探りたい。

タテ線譜とは

タテ線譜といっても、目にした

メリーさんのひつじー1

メリーさんのひつじー

ことのある人はほとんどいないと思われるので、初回のレッスンによく用いられる「メリーさんのひつじ」をサンプルとして説明する。

①タテ線譜では、五線譜が左から右へと横に音楽が流れるのに対して、ここでは上から下へと縦に音楽が流れる。

②五線譜のト音記号やヘ音記号といった音部記号のところに鍵盤図が上と下に記されている。楽譜の黒鍵の場所をピアノ鍵盤に

合わせて置く。これによって、黒鍵を含めたどの鍵盤を押えたらよいか一目瞭然としている。

③タテ線譜では、五線譜の符頭(たま)に当たるところに指番号が記され、どの鍵盤を押えたらよいか視覚的に直接判断できる。ここでは、指番号で示された楽譜をメロディを口ずさみ、弾いていく。

④タテ線譜では楽譜の見た目の繁

雑さができる限り避けるために、五線譜で用いる符頭（たま）や符幹（ぼう）、符尾（はた）は用いない。各音の長さは歌詞に合わせてメロディを弾くことで解消される。また、#やbも指番号をタテ線譜の線上に記すことよって不要となる。詳細は次の五線譜とタテ線譜比較表で説明。

⑤タテ線譜では、原則としてコード奏法を用い、コードネーム付き一段譜と同じスタイルになっている。ただし、小節毎にコードネームを記している。

⑥タテ線譜では、スラーやフレージを指番号付きの符頭（たま）を直接結んで表している。

タテ線譜メソッド

次にタテ線譜をどのように使ってピアノやエレクトーンなど鍵盤楽器の導入を行うのか、五線譜とタテ線譜による導入時の比較を説明したい。次の表は、筆者作成の日本音楽表現学会沖縄大会レジュメ。

五線譜による導入	タテ線譜による導入
1) 演奏する曲の音の高低と長短の知的理解 ⇒ <u>最初に理論ありき</u>	1) 演奏する曲の音の高低と長短を歌で感覚的理解 ⇒ <u>最初に音楽ありき</u>
2) 五線譜を読みながら、かつ指番号を確認しながら弾く ⇒ <u>鍵盤と音符の直接的関係無し</u>	2) タテ線譜のメロディの歌詞を歌いながら、指番号で弾く ⇒ <u>鍵盤と音符の直接的関係有り</u>
3) 伴奏は五線譜の伴奏部分の譜読みをし、かつ指番号を確認して弾く ⇒ <u>五線譜（大譜表）に書かれたメロディと伴奏を楽譜通りに弾く</u>	3) 伴奏はコードネームによる伴奏部分を、コードをつけて弾く ⇒ <u>タテ線譜に書かれたコードを発展してメロディも含めて自由に弾く</u>

五線譜とタテ線譜による鍵盤楽器導入に関する一番の違いは、五線譜の場合では、通常、楽譜の理解から音の高さや長さを理解する必要があり、「メリーさんのひつじ」の場合では、最初の音符はミ

で付点四分音符と呼ばれ、長さは一拍半、次はレで八分音符と呼ばれ、長さは半拍、その次はドで四分音符などと楽譜の知的理解が必須である。それとは反対にタテ線譜の場合は、カラオケと同じように「メリーさんのひつじ」を歌うことよって音の高さと長さを感覚的に理解・確認する。すなわち、五線譜の場合の「最初に理論ありき」に対して、タテ線譜の場合は「最初に音楽ありき」といえる。これにより、苦手とする楽譜に対する拒否反応から解放される。

二番目の違いは、五線譜の音の高さは楽譜の上下で示されており、鍵盤の音の高低（左右）とは関係はない。これに対してタテ線譜では、鍵盤の音の高低そのものが図示されている。すなわち、音符そのものが鍵盤の位置を示しており、両者は直接的関係がある。口ずさめる曲であれば、ストレートに鍵盤と結びつく利点がある。三番目は、通常の五線譜の入門書では、ポピュラー音楽の場合を

除き伴奏も書かれているが、「タテ線譜メソッド」では、コード奏法を用いる。この狙いのひとつは、複雑な譜読みからの解放にある。左の写真は、昭和音楽大学のタテ線譜メソッド講座で指導中の筆者。

ここでの課題は次のようなものが挙げられる。
・教材やレパートリーが「エリーゼのために」などのように誰でもよく知っている曲を除き、歌



▲タテ線譜講座で指導中の筆者

詞のついた既知曲に限定されること

・タテ線譜は楽譜が読めない人にとっては違和感がないものの、指導者がヨコ線譜といえる五線譜に長い間慣れて体に染み込んでいるため、タテ線譜に慣れるのに時間がかかってしまうこと
・将来、五線譜に移行するのであればタテ線譜に寄り道する必要はないとする考えなど

しかし、これらはシニア世代の人たちがタテ線譜で音楽を楽しんでいる姿をみれば一掃される。

タテ線譜から五線譜への移行

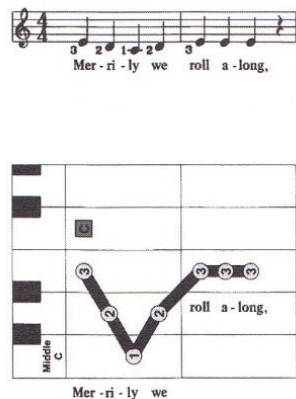
このメソッドの目的は、楽譜に対して苦手意識がある人たちに対する新たな音楽人口の需要創造にあるが、タテ線譜の教材やレパートリーが限定されていることおよび将来の音楽的発展を考えた時、五線譜への移行は避けて通れない問題である。

このことに関して、5年近くのいろいろな経験を通し、五線譜へ

の移行は予想していたよりもはるかに自然にできることを受講生から教わった。まさに「案ずるより産むが易し」である。

左の図は、タテ線譜自身に五線譜に移行する際の先行体験が含まれることを説明した部分である。タテ線譜を横にすると五線譜によく似ており、タテ線譜を用いること自体が五線譜移行の準備を間接的に行っているのがわかる。

元来、タテ線譜の特徴は楽譜そのものが鍵盤上の弾く場所をイメージして作られており、タテ線譜は立てておくためのものであるが、下の写真の人は楽譜を横にして弾いている。これにはいささか驚かされたが、理由を聞くと、楽譜が曲がってしまいうまく譜面台



▲タテ線譜を五線譜のように弾いている

に立たないので横にしたとのことであった。

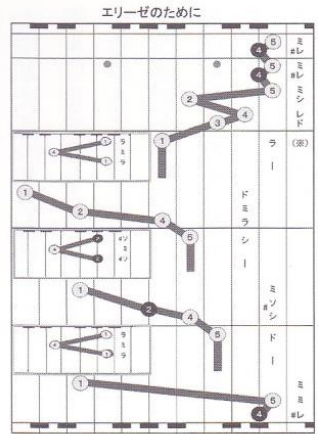
簡単な字であれば、縦書きの文を横にしても難なく読むことができる。「目から鱗」とはまさにこのことであり、既成概念に捉われない発想の重要性を学ぶことができた。

月2回の講座が1年経過した頃、受講生の一人が「月の砂漠」のやさしくアレンジされた楽譜を買ってきてこれが弾けそうなので、チャレンジしたいといってきた。楽譜については、少しのヒン

トしか与えなかったにもかかわらず、1ヶ月後には終わるまで弾くことができるようになった。

シニア世代の場合、身体的発力は若かりし頃に比べ、衰えが見えてきても、思考力やチャレンジ力はキープしている人が多い。60歳半ばでスタートした男性の一人は現在、ホルストの組曲「惑星」から木星「ジュピター」など数曲を楽しんでいる。この人達はタテ線譜と五線譜の両刀使いで自分の弾きたい曲とレベルで使い分けている。

朝日新聞の調査によると、もしピアノが弾けたら弾いてみたい曲のナンバーワンが「エリーゼのために」であった。タテ線譜では、音域の広い曲や16分音符など細かい音符の曲は楽譜が複雑になり過ぎて適していない。「シニアのエリーゼ」として編曲したのが左の楽譜であり、これがタテ線譜で記譜できる限界と思われる。



全員が五線譜への移行を望むわけではなく、約30%の人たちはタテ線譜だけで満足する人である。このタテ線派ともいえる人たちは、音楽を「健康の音楽」「生き甲斐の音楽」と捉えてやさしい曲の演奏を楽しんでいる。いずれにせよ、本格的シニア時代を迎えて、これらの人たちが音楽を楽しむ新しいジャンルの一員であることは間違いない。

タテ線譜を取り巻く話題

ここまでシニアの健常者を対象としたものだったが、ワタミ老人ホーム「レストヴィラ海老名」でタテ線譜の紹介講座を一昨年4月に開いた。その時、パーキンソン

病のリハビリのひとつとしてタテ線譜で指を動かすことができないかとの相談を受け石川ノリ子さん（写真左下）が取り組んだ。介護士の星野智英さんからの情報によると、現在、「もろびとこぞりて」や「エーデルワイス」などを楽しんでいるが、医者から体の傾きが取れて姿勢が悪くなってきたとほめられたとのことである。楽器を弾きたいという積極的行動がこのように姿勢までも変えてしまったようだ。

タテ線譜メソッドでの悩みのひとつに楽譜作成に時間がかかってしまうことがあるが、昨年の日本電子キーボード音楽学会におけるタテ線譜の発表を聞いた国立木更津高等工業専門学校の齋藤康之先生がタテ線譜作成ソフトの研究に取り組みはじめている。

今年の2月、映像情報メディア学会で「MIDIファイルからのタテ線譜の生成に関する研究」を学生に発表させ、6月の国際学会

(The 1st Int'l Conference on Advanced Imaging) では自分で発表する。

また、シニアと音楽環境に関する日本の現状調査に来日中であった台湾・東海大学の郭宗愷教授が3月、昭和音大の講座を見学に来学するなど海外でも注目しはじめている。

おわりに

日本の音楽需要創造の一翼を担ってきた企業の音楽教室の視点からみると、昭和29年にヤマハ音楽教室の前身となる教室が始まったことが挙げられる。その特徴は、

「幼児対象のソルフェージュ教育をベースにグループレッスン」というそれまでになかったものであった。

その後、昭和44年のエレクトーンメイトコースの開設後、カワイ、ビクター（現ローランド）などの電子オルガン教室が続いた。そこでの対象は「20代を中心とした成人で、音楽内容はポピュラー音楽、コード奏法」が特色となっている。

その後のバブル期になり、音楽教室は中高年対象の教室がフィーチャされるようになり現在に至っているが、最近では音楽に限らず中高年の中でもシニア世代の習い事が注目を浴びている。

過去、子どもや成人の音楽導入に対して「ソルフェージュ教育」「コード奏法」など新しい内容が提示されてきたが、中高年時代、特に「本格的シニア世代を迎えて、『タテ線譜メソッド』もピアノ導入の一つ」と考えられるのではなからうか。



▲姿勢がよくなったと医者を驚かせた石川ノリ子さん

